

「国語っておもしろくて、深い！」 と思わせる

授業びらきでは、生徒に「国語の学習って、おもしろくて深いんだな」と思わせたいと話す宗我部先生。第一單元では、生徒の知的好奇心をくすぐるような授業をされています。また、ノートの取り方、発表やグループ討議のしかたなど、授業中の「作法」についても、最初の授業で丁寧な指導されるそうです。今回は、宗我部先生のさまざまな授業びらきの工夫の中から、一部をご紹介します。



そが べよしのり
宗我部義則

埼玉県生まれ。お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学非常勤講師。国立教育政策研究所「教育課程実施状況調査問題(中学校国語)」作成および分析委員。平成20年告示中学校学習指導要領解説国語編作成協力者。編著書に「群読の発表指導細案」(明治図書出版)など。光村図書中学校「国語」教科書編集委員を務める。

1 声や言葉に対する 興味・関心を引き出す

最初の單元では、国語の学習の「根っこにあるもの」に対する興味・関心を引き出すような授業をするように心がけています。例えば、一・二年生だったら、「響く声」を身につけよう」という授業をよく行います。国語の学習の根幹にある「声」についての興味を引き出す内容です。

「声というのは『出す』ものでなく、塊^{かたまり}で『届ける』ものなんですよ」と切り出し、



私が窓側・廊下側・一番後ろの席など、さまざまな方向へ声をかけ、生徒に聞こえ方を確認させます。また、一人の生徒を前に立たせ、胸の前でボールを受けるときのように手を広げさせます。「この手の平にあてるように、声を出してみよう」と投げかけ、残り全員で「わつ」と大きな声を出します。すると、一点に集中した声は驚くほどの圧力をもって感じられ、前に立った生徒は「手の平に『音圧』を感じた」などと話します。そうやって、「声は『塊』で届く」ことを体で感じて納得させるのです。

の静から「蛙飛び込む水の音」の動へ、そして再び静寂へ。けれど戻っていった「静の世界」は、最初のよどんだ死の世界ではなく春の生命感がじわりと感じられる「生の世界」です。この授業の後は「こんなにいろいろな意味があるとは思わなかった」「俳句の中に大きな宇宙があるみたい」などの感想が寄せられます。俳句は、テキスト全体を見渡したうえで、表現方法やその効果を検討できるので、言葉の奥深さやおもしろさを短い時間で感じ取らせることができます。三年生の授業びらきの教材としてたいへん有効だと思います。

2 話し合いのしかたを 身につけさせる

授業びらきでは、これから授業を受けるための「作法」的な部分も教えていかなければなりません。私はグループでの話し合いを多用するので、次のようなグループ討議のしかたを、第一・二單元で、しっかりと指導するようにしています。

- ・ 四人一グループになる。
- ・ 進行役を立て、その人が話し合いを仕切る。進行役は日替わりで交代。
- ・ 話し合う前に、進行役は前に集まって、

教師から進め方について指示をもらう。

- ・ 進行役が、発表者を指名できる。

このようなルールを決めて進行役にリーダーシップを取らせ、周りの子たちには、話し合いがうまく進むように、リーダーをフォローさせます。

また、発表者に対しても、最初のうちは「なぜそう考えたの?」「今言ったのは、どこに書いてあるのかな」など、根拠を示して発言することを、意識的に徹底するようにしています。

この授業では、全員で声を出すので、一体感が生まれ、教室がとても楽しい雰囲気になります。第一時で「響く声」を行った後は、第二時で「響く声で、〇〇さんを紹介しよう」という、インタビュークラスメイトを紹介する、という授業をしたり、「朝のリレー」などの詩を使って群読や朗読を楽しんだりしています。

いっぽう、三年生なら、言葉の奥深さに出会わせたいので、よく俳句を取り上げます。俳句は世界で最も短い定型詩といわれますが、この短い言葉のつながりの中に、



イラスト：田上千晶

3 ノート指導はきめ細かく

ノート指導はすればするほど、国語の力がつくと思っています。ノートをきちんと取ることで、授業に臨む姿勢がつかれますし、家で学習内容を振り返ることもできるからです。

ノートは罫線で区切って上段と下段に分けさせています。上段は、板書の写しなどの授業記録、下段は、グループで話し合ったこと、自分が授業中に考えたこと、気づいたことや発表前のメモなどです。生徒には「下段をいかに充実させていくかが大事なんだよ。ノートを区切る線が、だんだん上にあがって下段のスペースが増えていくことを目指そう」と話します。また、単元の終わりに、その単元のまとめを自分の言葉で書かせるようにしています。

私は、単元が終わるごとにノートを集めるのですが、最初にノートを集めるときは、特に気合を入れて見るようにしています。生徒が書いた言葉を丁寧に読んでいき、必ずコメントを入れ、誤字もチェックします。すると、生徒は返ってきたノートを見て「こんなに細かいところまで読んでくれたのか」「たくさんコメントが書いてある」と、とても驚きます。うまくまとめている

生徒のノートはカラーコピーして模造紙に貼り、「ここがいい」と私がコメントを書き込んだものを廊下に掲示し、よいところをみんなで共有し、参考にし合います。また、年に何度か「ノートの大点検」を行い、観点を細かく示して、ノートをチェックするようにしています（下図参照）。

ノートを丁寧に見ていくのはとても骨の折れる作業ですが、ノートを大事に考えているということを、教師が態度で示さなければいけないと思っています。最初は細かくチェックしますが、慣れてくると、線を引いたり、丸を付けたりするだけで通じるようになります。「線が引いてあるから、先生はここが大事と言いたいんだな」と生徒がわかるようになってくるからです。そうやって、徐々にかける時間を減らしていくと、無理なくノート指導を続けていくことができます。

国語科は、学習の中でどのような力が身についたのか、他教科に比べ自覚しにくい教科だと思います。ですから、学習記録や自分の考えをノートにまとめて可視化することで、それが自分の力になっていることを意識させることができたいと思っています。

（談）

ノートの1ページ目

最初の授業で、1年間の目標を考えさせ、1ページ目に書かせる。授業のたびに目にするようになるので、目標を意識させることがねらい。

1年間の目標

- 1. 自分の意見をしっかりとまとめる**
1つ1つのことをしっかりと考え、ノートに簡潔にまとめられるようにしたい!!
- 2. 積極的に発言する**
小学校・中学校ではあまり発言することができなかったが、発言することによって、自分の意見をちゃんと理解することができると思うから
- 3. ノート記録の充実化**
特に友達の意見を記録することに重点をおきたい。記録するにはしっかりと聞かなければいけないから授業に集中できる。また、後から振り返る時など自分の意見を変えたのかなど分かるように早く文を書けるようになるから

「君は『最後の晩餐』を知っているか」（2年）を学習したときのページ

上段は授業の記録。板書や主な発言を記録する。

君は『最後の晩餐』を知っているか

上段は授業の記録。板書や主な発言を記録する。

下段は、グループでの話し合いの内容や、自分の考えなどをまとめる。

単元の最後の「学習のまとめ」

単元の終わりには、学習のまとめをする。「君は『最後の晩餐』を知っているか」では、「評論を読むコツ」について、まとめさせた。

評論を読むコツ

筆者の考えが述べられている箇所をまず読み、筆者の意見が述べられている箇所を次に読む。筆者の意見が述べられている箇所を次に読む。筆者の意見が述べられている箇所を次に読む。

ノートを、四つの観点でA～Dの評価をつける。特にすばらしい人は、Sがつく。今回の観点は下記のとおり。

- 最後に「評論を読むコツ」が具体的にまとめられているか。
- 自分の考えがまとめられているか。
- 毎日の授業記録がしっかりとできているか。
- ワークシートにきちんと書き込みがあり、ノートに貼つてあるか。



観点を示して、「足りないところをまとめ直してきたら評価を上げますよ」と伝え、多くの生徒がノートをまとめ直してくる。この生徒は、「評論を読むコツ」をまとめ直し、AからSへ評価が上がった。

スタンプは「いいちようし!」「もう一息」「問題をよく見て!」「がんばろう」の4種類がある。